
アイドルマスター×まよチキ

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドルマスター×まよチキ

【Nコード】

N2462BA

【作者名】

学校嫌い

【あらすじ】

神が寝ぼけていた所為で死んでしまった俺は、その後訳の分からん空間においてそこでポケモン談義に花を咲かせ、その後色々頼み、アイマスとまよチキの二つの世界を併せて貰いそこへ転生することに……。まあ、楽しみましようや。※不定期更新

ポケモン談義（前書き）

思いつきで始めました。

ポケモン談義

唐突ですが、俺こと新山響にいやまきょうは、ほんの数分前に信号無視の軽に轢かれて死んだのだが、目を覚ますと何故か肉体もあり意識もハッキリしていた。しかも、傷まで無くなっていた。んでもって目の前には……なんか………こう女将かみさんのな

「かみ違いでしょ、それは」

おっと聞こえていたいたようで。

「ていうか、聞こえてるならさっさと入って来いよ。延々モノローグかと思っただろ、こんボケ」

「私が悪いの？」

「知らん」

女将さんが溜息をついた。

「まあ、あまり動揺とかしてないみたいだし、本題に入るよ？」
「ウイ」

「死んだのは分かってる？」

「ウイ」

「ごめん。それ、私の所為」

「ウ……はい!？」

あまりにも軽く言われて危うく流す所だったぞ。

あ、ちなみに俺は生粋の日本人なんで、髪も目も黒だべよ。後高
校生。

「いやね？ ホントはあの車が信号を無視することも、もちろんあんたが死ぬことも無かったんだけど……昨日遅くまでゲームしてて、寝ぼけてたみたいでさ……いや、ホントごめんね？」

この女将さんは正反對の真っ白な髪してて、目は蒼。身長は百六十くらいかな？ あ、俺は百七十。

「女将さんもゲームとかするんだな？」

「あ、聞く所そこなんだ？ まあ、いいや。ほら、昔やってたゲームをやり出すと止まらないことってない？」

「あ、あるある。なんか夢中になるよな？」

「でしょ？ で、ポケモンのサファイアを発見してね？ やってみたら面白くってさあ……あんたは最初のポケモン何にした？ 私はミズゴロウ」

「俺はキモリだったな……でも、アスナの所は苦勞した」

「あ……炎タイプだもんね。砂漠で地面タイプ捕まえてもそこから育てるのって面倒だし」

「そうなんだよなあ……まあ、最初のジムはかなり簡単に済むんだけど」

「そこはミズゴロウも同じよね？ なんてったって水タイプだし。でね？ 思うんだけど、岩タイプって弱点多すぎない？」

「それはホントに思うよ。鋼・水・草・地面・格闘の五つもあるんだからな……そう考えるとあれでジムリーダーになるって凄いよね？」

「そうよね……あ、後さ、あの四体は共通して格闘が弱点よね？」
「レジ兄弟だろ？ なんてだろうな？ 考えるのが面倒だったのかな？」

「どうなんだろう……あ、他にもやったことあるポケモンシリーズって何がある？」

「えつとな……金・銀・クリスタル・ルビー・サファイア・エメラルド・ダイヤモンド・パール・プラチナ・ブラック……この辺りだな」

「結構やってるのね？」

「ああ。それでさ、プラチナって、ディアルガとパルキアの両方が出るだろ？」

「ええ。捕まえるの結構大変だったわ」

「俺もパルキアは苦労したんだけどさ、ディアルガはモンスターボール一発でゲット出来た」

「うそ!？」

俺の言葉に異様な反応を示し、女将さんは詰め寄って来た。て…近くで見ると可愛いな。顔のパーツはどれも整ってるし、なんか良い匂いもする。

「ねえ、それ本当なの!？」

「あ？ あ、ああ。ガブリアスの地震でな、半分位減って、投げてみたらゲット出来た。いやあ、ビックリしたよ。思わず二度見しちゃった」

思考を振り払って答えれば、女将さんは興奮した様子で俺の手を握ってきた。そこまでか？

「それで？ とりあえずポケモン談義は置いてといてさ」

「あ、そうだった……これからのことなんだけど、貴方はどうしたい?」

「と、言うത്?」

女将さんは俺から少し離れて座った。

「私の所為で、貴方は死んだから……元的生活に戻すことは出来ないんだけど、別の世界に送ることな出来るの。それから、お詫びとして何かお願いがあるなら、可能な限り叶えることも出来るんだけど」

「なるほど……じゃあ、とりあえず一つ目の願いとして、俺を轢いた車の運転手が俺を轢いてないことにしてくれ。近くで遊んでた子どものボールに突撃したとか、そんなんでいいからさ」

俺はもう死んでる訳で戻すことも出来ないなら、結果を変えても俺がここにいることは変わらないだろうしな。あの近くには公園もあったから、それで問題ない筈だ。

「え？ いいけど、どうして？」

「運転手だって、あんたが寝ぼけてた所為で俺を轢いちまったんだろ？ それじゃ、そいつのこの先の人生お先真っ暗じゃねえか。そんなのはご免だ」

「あ……ごめん」

「謝らなくてもいい。結果を変えてくれたらそれで」

謝る女将さんの頭を撫でると、小さく頷いた。

「それから、ついでに俺の存在を無かったことにしてくれ。そうしないと不自然になるからな」

「え！ そんな、どうして!？」

急に頭を上げたことで、俺の手が離れた。

「結果を変えて、俺が死んでないことになった。でも、俺はここにいる。それなら、死ぬ前の俺はどこに行ったんだって、なるだろ？ そうすると親父とお袋、特に妹が心配しちまうし。家族を心配さ

せたくないからな」

「でも、友達とかの記憶からも消えるよ？」

「構わないって……ていうか友達いねえし……それで？ 出来るか？」

「もちろん……できるけど」

「じゃ、まずはそれを頼む」

「……………」

女将さんは暫く黙り込んだが、やがて無言で頷き立ち上がった。そして目を閉じると、何かを呟き始めそれもすぐに終り、目を開いた。

「……終わったよ？」

「おう。サンキュ……て、どうした？」

女将さんは、何か沈痛な面持ちをしていた。

「本当に良かったの？」

「ああ。で、次なんだけど、さっき別の世界に送ることは出来るって言ったよな？」

「うん」

「それってさ、別々の世界を一つにすることも出来るのか？」

「え……あ、世界観が近いなら、出来ないことはないけど」

「じゃあさ、『アイマス』と『まよチキ』。この二つを併せることってできるか？ 世界観も近いだろ？」

「うん。それなら出来る。でも、どうしてその二つ？」

「いや、どっちの世界にも行ってみたいなく、って思ってたさ」

あの二つがもし同じ世界で起こってたらどうなってるのか、って考えると結構面白い気がするし。

「そうなんだ……うん、それは、貴方を送るのと同時にやっておくわ。家族はどうする？」

「いい。捨てられたってことにしてくれ。死ぬってのは、いくらなんでも嫌だしな」

「そんな……そこからどうするの？」

「あんたの力なら、なんとか出来るだろ？　まあ、細かいことは任せる」

「……分かった。他には？」

「『如月優』の死が起きない様にしてくれ。あ、でも、765プロに所属するのは変えないで。これくらいで頼む」

「分かった。それじゃ、早速送るね？」

「ああ。楽しかったよ」

「私も楽しかった」

まさか、死んだ後にあんなにポケモンの話しに花が咲くとは思ってなかったしな……女将さんも喜んでくれたみたいで何よりだ。

「お？　なんか、急に眠気が……」

「大丈夫。目を覚ましたら、貴方の希望通りの世界にいるから」
「そ……か……」

駄目だ。強すぎて何も言えん。

「バイバイ、響。またね？」

意識を失う寸前に見たのは、笑いながらそう言って手を振る女将さんだった。

幼馴染みは金髪三つ編み

「……………きよ……………」

誰かに名前を呼ばれ、俺の意識は少しずつ覚醒していき、もう少しで目を覚ますと言った所で、

「響！ 起きなさい！」

思っくそビンタされた。

「あのさ……起こす時にビンタするのいい加減止めてくんない？

毎朝教室入った途端笑われるんだからな？ 特にあの黒髪ツインに」

「だって、起きないでしょ？」

「まさに起きようとしていた所でいつもビンタが飛んでくるんですけどね！」

「じゃあ、明日はもう少し優しく起こしてみる」

「そうしてくれると助かる」

やあ、皆さんこんにちは、或いは今晚は、また或いはおはよう。
ご存じ新山響です。

女将さんのいる所からこの、アイマスとまよチキの世界に送られ

た後、目を覚ますと赤ん坊で頼んだ通り捨てられた設定になっていたが、そこも頼んだ通り生きていける様にしてくれた。それで、その後暫くして、めっちゃ小さくなった女将さんが来たんだよ……いや、ビックリしたね。いきなり近づいて来ていきなり俺を連れて行ったからな……誘拐にしか見えないぞ。

『心配だから、響が死ぬまで一緒にこっちで生活する』

と言って聞かず、その日から女将さんと俺は家族となった。連れてこられたのは、浪嵐学園の近くにある家で、当然高校はそこに行くことになった。話が前後するが、それまでの十数年間でアイマスメンバーとも全員知り合った。

「にいやまゆき
新山雪」

「いきなりなんだ？」

「え？ 自己紹介。ちなみに神の時の名前は『ミーシャ』」

「まあ、知ってるけどな」

「見てる人は知らないでしょ？」

「あ、なるほど」

ちなみに俺も雪も容姿は全く変わってない。

さて、では次に、

「あ、響くん、雪ちゃん。おはよう。相変わらず綺麗な紅葉だね？」

「だろう？ そしておはよう、歌織」

「おはよう。響の『そして』の意味が分からないけど」

幼馴染みを紹介しようと思う。

今、俺たちに声を掛けてきた女の子は、まよチキのアニメ十三話で同人誌販売の会場にいたりゲームショップっぽい所から大量の買い物をして出てきた金髪お下げを三つ編みにしている奴だ。よく分からんと言う人はアニメを見ておくんまし。で、名前は緋耶麻歌ひやまか織おり。俺たちのお隣さんで、幼少の頃から一緒に遊んだり、ポケモンやったり遊びまくったりして、高校生になった今もそうやって遊んでいる良き友だ。アニメでは、浪嵐じゃなかったが、この世界では浪嵐に入っている。クラスも俺たち三人は一緒……というか、幼稚園の時からずっと一緒だった。

「所で歌織よ」

「なんだね、響くん？」

「宿題はやりやがりましたか？」

「やりやが………ってる訳ないでしょ！」

「だよなあ！ あははははは！」

「そうだよお！ 分かってる癖にい！」

互いに笑い合いながら少しずつ向きを雪に変えていき、

「「写させてください！」」

腰を九十度に曲げて頭を下げた。

「せい！」

「いって！」

「あう」

だが、拳骨を喰らった。

まあ、威力は明らかに俺の方が強かったが……。

「昨日ね、ホワイトをやってて、キュレムを捕まえに行ってたんだけど、途中でメタングが出てきたのね？　それで……………」

学園に到着し、教室に入ると案の定黒髪ツインに笑われ、執事は笑ってはいなかったが肩が震えていた。席に着き、まあいつもの様に周りには雪・歌織・黒髪ツイン（もう分かっていると思うから今後は涼月と言うことにする）・執事（以下略で近衛と以下略）・坂町兄・黒須が集まった。その中で何故か俺の膝の上に陣取った歌織が昨日のポケモンの話を始め、そこで一旦言葉を切った。

「それで……………どうなったんだ？」

近衛が早く続きを言えと言わんばかりに身を乗り出して聞いた。

「……………そいつにモンスターボール全部使っちゃったあああ！　響くん！　もうあいつ嫌い！」

「おお、よしよし。よく頑張ったな」

そして膝の上にも関わらず器用に俺に抱きついてきた。頭を撫でながら慰めていると、どうしてだろう？　周りの気温が少し下がっているような気がするの。まあ、いいか。

「う……………うう……………響くん、暖かい」

「そうか？」

「……………」

少し泣きやんだ歌織がこのままだと眠りそうな声色でそう言い、涼月と近衛は何か笑みとオーラを放ちながら、坂町兄と黒須は怒った顔で見えていた。雪は泣いている歌織の頭をそつと撫でている。ふと視線を感じ、教室の中を見回してみると、男子生徒の殆どがどす黒いオーラを浮かべて俺たちの方を見ていたが、まあ、気にしない。これもいつものこと。その後、数分が経過した所で始業を告げる鐘が鳴り担任が入ってきた。

「おらそこ、イチヤついてないで席に着け……って、なんだお前らか。じゃあ、いいや。今日は始業式が終わったら解散だからなく、さっさと体育館に行け。以上」

そう言って担任は、席に着けと言ったにも関わらず殆どの生徒が席に着いていない状態で適当に説明し退散していった。

「なあ、涼月よ」

「何かしら、響くん？」

「お前の親父さんはなんであいつを雇ったんだ？」

『……………』

その問いに答えられる者はいなかった。

「(略)。良い学園生活を送るように」

正しくあつという間に始業式は終わり、学生はみんな解散となった。涼月と近衛は車で帰り、坂町は真っ直ぐ帰った。黒須はどっか寄っていくみたいだ。

「おう、どした？」

『やつほー！ 響兄ちゃん！ 今暇？』

「ああ、暇と言えば暇……でもないみたいだ」

『あれ？ そうなの？』

電話の相手は765プロ所属アイドルの一人、双海真美。暇かどうか聞いてきて、暇だと答えようとした所、歌織に睨まれそういえばゲームする約束をしていたな、と思い出し撤回することになった。

「それで？ どうしたんだ？」

『あ、そうそう。最近、響兄ちゃん来てないでしょ？ それでみんな暇になってさ……少しでも来れない？』

「あ……そういえば、春休み初日しか行ってなかったな。雪達も一緒に問題ないなら、多分大丈夫だぞ？ いいか？」

聞くと二人は頷いたので、それを伝えると真美は二つ返事で了承した。適当な服に着替えて、DSとPSPを携帯し三人で仲良く765プロへ向かった。DSにはポケモンのブラック、PSPにはセブンスドラゴン2020を入れて。

765プロの面々 Part 1

「それで、歌織、キュレムは結局どうしたの？」

「疲れてたから、モンスターボール買っただけ買って終わった。事務所で捕まえる」

「頑張っただけ？」

「うん。絶対捕まえる」

道中、歌織はキュレム絶対ゲット宣言をし、雪はそんな歌織を応援していた。それから二十分程歩き、俺たちは事務所に到着し中に入った。

「「響兄ちゃん！」」

「うおっと！ 久しぶりだな、亜美、真美。なんで髪型変えてるんだ？」

『えっ！？』

声を上げたのは、雪・歌織・天海・星井・菊池・如月・我那覇・秋月・音無の九人。プロデューサーと社長、他のメンバーはまだ来ていないか、どこか行っているからだろう。中に入って、お茶を入れソファに座ると歌織が隣に座り早速キュレムを捕まえる為DSを起動させた。

「歌織お姉ちゃん、ポケモンするの？」

「うん。キュレム捕まえるの」

「できるの？」

「やるの」

「響、きゅれむ、ってなんだ？」

「私も分からないわ。何か聞いたことがある気がするんだけど……」

亜美と真美、星井の三人は歌織の周りに集まって様子を見守り、雪は秋月、音無、菊池と話している。我那覇と如月はよく分からないように、俺に説明を求めてきた。

「ポケモンのブラックとホワイトに出てくる、三体目の伝説のドラゴンポケモンだよ。我那覇はあまりゲームとかしないだろうが、如月は優がやってるから多分それで聞いたんだろう？」

「あ……きつとそうだわ、うん」

「ん？ まあ、いいや。なあ、響、自分とはいつ遊んでくれるんだ？」

分からなかったらしい我那覇が、俺にそう聞いてきて、そっちの予定が空いている日ならいつでも良いぞ、と言うとかなり喜ばれた。俺と遊ぶのがそんなに楽しいのか？ まあ、俺は楽しいが……。

「じゃあ、我那覇さんの予定が終わった後でいいから、家に来てくれない？ 久しぶりに優も会いたがってると思うから」

「おう。いいぞ」

「ありがとう。所で、見た時から気になってたんだけど、どうして頬が赤いの？」

「ん？ 今更説明が必要かい？ 如月君」

「ああ、そうだったわね。ごめんなさい」

「相変わらず雪のビントは強烈なんだな？」

「そりゃあもう……本気で打たれたら首なんて吹っ飛ぶね」

「ふーん……私はそんなに凶暴な女だと思われてるのね？」

その声が聞こえた瞬間、事務所内の時間が止まった様な錯覚を俺は覚えた。どうしてだろうなあ？ 何か背後からとっても冷たいオーラを感じるよ？ これは、あれかな？ キュレムの凍える世界でも発動しているのかな？

「フ。我那覇、悪いが遊ぶのはもう少し後になりそうだ……」
「う、うん……」

我那覇がそう返事をしたと同時に、俺は首根っこを掴まれ事務所の外に引き摺られた。

「いやあ……マジで死ぬかと思った」

「大丈夫、響君？」

「ていうか、あれだけやられて無事なのが信じられないわよ」

「ホント、しぶといよね、響って」

「まあ、唯一響ちゃんと本気で遊べるだけはあるわね」

「確かに……」

小一時間程、つねったりくすぐられたりと地味に苦痛を与えられ終いには窓から放り投げられたが、ガキの頃から雪に鍛えられたお陰がかすり傷程度で済んだ。戻ってくると、まずは星井に心配され、後の秋月、菊池、音無、天海には呆れられ、雪と歌織以外の奴らも全員俺のしぶとさに呆れたが、まあいつものことだ。ちなみに歌織は無事キュレムをゲットしたらしく、戻って来ると勢いよく飛びついてきて証拠の図鑑画面を見せてきた。頭を撫でると、尚更嬉しく

なったのか強く抱きついてきた。

「全く、俺か坂町兄じゃなかったら死んでるぞ」

「ふん。響が悪いのよ」

「悪かったよ。晩飯好きなの作るから」

「……………なら許す」

「サンキュ。歌織はどうする？」

「もちろん行くよ」

「OK。そんじゃ、帰るか」

「えー、響兄ちゃん、もう帰るの？」

「ああ。でも、今後は週に一回程度は顔出さ。それから、亜美、どうしてまた髪型変えてるんだ？」

『え！？』

またか……ていうか、いつの間に変えたんだよ。まあ、その後俺たちは真美達にバイバイして家に帰った。帰る時に、我那覇が遊ぶ日決まったら連絡するからなー、と元気に言っていた。

「響くん、響ちゃんとどんなことして遊んでるの？」

「春はおいかけっこ、夏は海で五十？泳、秋はどんだけ紅葉を巻き上げられるか勝負、冬は雪合戦。主にこんなことしてるな……にしてもあれだ、我那覇が高校生なのに双海姉妹より小さいと言うのは些か不思議だ」

「それはまあ、どうでもいいとして、五十？なんでホントに泳いでるの？」

「ん？　どうだろうな？　前、どれくらい泳いだか分からなくなつた時があつてな、それからとりあえず五十？にして、後は感覚で決める」

「ホント元気だよね、響くん」

「フ。まあな」

なんて話をしながら帰路を並んで歩き、後五分程で家に着くというところで我那覇から電話が掛かってきた。出てみると、早速遊ぶ日が決まった様でその連絡らしい。俺たちが帰ったすぐ後にプロデューサー達も帰ってきたみたいだ。それで、結果来週の日曜日に遊ぶことになった。

『絶対負けないからな!』

「何を言うか。俺こそ負ける気など毛頭無い!」

『へへ、楽しみにしてるぞ!』

「おう。じゃあな」

『うん』

通話を切ると、どうやら二人は内容がバツチリ聞こえていたらしく、楽しそうに笑っていた。あいつが元気じゃない時なんて、殆ど見たことないからな……まあ、見たくも無いが。そういや、妹は元気にしているだろうか？ ま、俺は最初からいないことになってるんだからまともな人間になってるだろう。なんてことを考えながら、家に到着し、歌織共々中に入ると、

「あら、遅かったわね？」

黒髪ツイン、もとい涼月がいた。

一日の終わりは賑やかに

「……………さて、飯作るから雪は風呂の準備頼むわ」

「フフ。見事にスルーしたわね。好きよ？ 貴方のそういう所」

「はあ。どうやって入ったのかとかは敢えて聞かないが、何の用だ？ 飯か？ 飯なのかこの野郎？ あれか？ もっと食ってその胸でかくして雪達との差を更に決定的な物にする気か？」

「みんな、ここは怒っていいわよ？」

『言われなくとも』

「……………あるえ？」

涼月以外の三人、雪、歌織、近衛はどこからともなく得物を取り出し俺に迫ってきた。みんな顔は笑ってたけど目がマジだったよ……いやあ、怖かったね。

「なんてモノログしながらピンピンしてるのよね」

「しぶときだけは折り紙付きですからね」

「失敬な。原因の一旦はお前にもあるんだぞ、近衛？」

「そうだよね。しょっちゅうバトルしてたし」

「ま、全部俺が勝ってるけどな」

「当たり前よ。私が鍛えてるんだから。負けて帰ってきたら更に負かしてやるわ」

「Oh its violence」

三人にぼこられた後、何故か近衛と涼月のリクエストの料理も作ることになり、できあがったのが五分程前。家はかなり広いから、今のメンバーに765プロの全員が入っても問題ない。家賃やらな

んやは、雪がなんやかんやしたらしいから、問題なし。そして、
どういう訳か涼月と近衛は今晚泊まるらしい。出来れば止めて貰い
たいんだが……近衛の親父は娘LOVEだからな、次あった時は問
答無用で殴りかかってくるかも知れん。まあ、殴り返すが。そんな
こんなで飯を食い終わった後、俺と雪と歌織はヴェスペリアをプレ
イしていた。PS3版の方。俺はリタ、雪はユーリ、歌織はラピー
ド。雪のテクが半端ないのはいつものことだが、こいつとんだけゲ
ームしてたんだろな？

「あがったわよく。相変わらず大きいわね、この家のお風呂」
「そうですね……流石にお屋敷程ではありませんが、かなりの大き
さです」

二人があがって次は雪と歌織が入ることになり俺一人になったが、
涼月と近衛が参加してきた。ただな、いつも思うんだが、

「なんで近衛が操作するキャラは規格外な動きをするんだろな？」
「さあ」

近衛操るジュデイスはずっと空中から降りてこない、しかも1ダメ
ージ付いてるからかれこれ五分はその状態が続いてる。いや、フェ
イタルストライクやって上げよう、と思うのはきつと俺だけじゃな
いと思う。隣にいる奴は違うだろうが……。

「何か言った？」
「いやなにも。近衛、いい加減終わらせてくれ、暇だ」
「ん？ ああ、分かった」

ズバン、とフェイタルストライクの音が聞こえ、それが止めとな
りグリムザは散った。経験値のボーナスが凄いことになってたよ。

今更だが俺たちは近衛の秘密を知っており、知っていることを理事
長も知っているがなんでも俺たちなら問題ないそうだ。ちなみに坂
町はまだ知らんが、近いうちに知ることになるだろう。まあ、何が
言いたいかと言うと、今の近衛は髪を下ろしているってことだ。俺
はこっちの方が好きだけどな…：パジャマもなんかフリフリが付い
てる奴だし、ここにいる時はかなり気を抜いているらしい。そん
だけリラックスしてくれるのは嬉しいけどな。

「ツイスターゲームをしましょう」

「脈絡が一切無いのは流石だよ」

「お褒めにあずかり光栄ね」

褒めたつもりはないんだが、まあいいか。セーブして電源を切り、
棚の中に入っている（棚に入れる意味が分からん）ツイスターゲー
ムを取り出し（他にもチェスやら囲碁やらオセロやら）準備をする。
最初は俺と涼月で勝負することになり、近衛がルーレットを回すこ
とになった。

「どうしてこうなった？」

「どうしてかしらね？」

「……………」

ゲーム開始数分後、俺は右手を赤、左手を青、右足を黄色、左足
を赤においている。そのそれぞれが丁度良い具合に結ぶと四角形に
なっており、四つん這いとなっている状態だが、その下には同じ様
な体勢の涼月がいる。何が言いたいかと言うと、俺が後ろから涼月
を襲っている様な体勢となつていふ言うことだ。さうて、ここで
皆に問いたい。今この場にいるのは、俺と涼月と近衛の三人。そし

て風呂に入っている二人はまだいない。が、風呂の方からなにやら声が聞こえ、そのすぐ後足音が聞こえてきた。つまりここに向かっていると言うことだ。そうなると俺はこの状態をあの二人に目撃される訳だが………どうすればこの窮地を切り抜けることが出来るだろうか？ え？ そんなの知らない？ だよねえ！

「響、あがった……わ……」

「どうしたの？ ゆ……き……」

俺が諦めた正しくその時、リビングに雪と歌織が入ってきた。二人とも俺たちの状態を見て言葉を失い、雪は手に持っていたタオルを落とし立ち尽くしている。歌織も続くように俺たちを見て固まった。

「ゆ、雪、歌織……これには理由が」

「きょぅぅ」

「は、はい！」

地獄の底から呼ばれた様な錯覚を覚えながら、返事をし勢いよく立ち上がる。その時に何か涼月が残念とか言っていたがんなこと知らん。二人ともお陀仏になるよりは悠にマシだ。

「こっちに来なさい」

「はい！」

「良い返事だな」

黙ってろ、近衛。お前もやられるぞ。そう思いながら雪に近づいていくと、途中で歌織は正気に戻った様で何がなにやらと言った感じだったが、雪と俺の様子を見ると全てを察したらしく、大人しく近衛達の方へと向かった。流石は幼なじみ、よく分かってらっしゃ

る。

「みんな、少し響とおはなしがあるから適当に遊んでね？」

『はい』

「薄情な奴ら」

「何か言った？」

「いえなにも！」

その後、本日三度目となる制裁を食らい風呂に入ったが、傷に染みた。いやあ、流石は女将さん、強いな。でも制裁に神の力を使うのは止めて欲しいなあ、と思う今日この頃。何はともあれ、新生生の初日は賑やかだったな……。

「そういや、鳴海姉がちょっかい出してこなかったな。まあ、いいか」

妹も入るみたいだし、今後は余り関わって来ないだろう。ちと寂しいが、しゃあない。さて、明日からはどんな学園生活が始まるのだろうかね？

青春かも知れない

「新山君！ わたし、あなたのことが好きです！ 付き合ってください！」

二年生としての学園生活が始まって今日で四日目。俺は放課後の屋上で告白をされると言う、なんともベタな青春マンガの一ページの様なイベントを体験した。さて、前回に引き続き悪いが、どうしてこうなった？ ちょっと今日一日のことを思い出してみようと思う。以下は回想だから、特段興味の無い奴はすっ飛ばしてくれて一向に構わん。それでは始める。

∞

まず朝は、雪による軽めのビンタで目を覚ます。それでも紅葉は出来たがまあ、気にしない。その後珍しく雪よりも早く起きていた歌織が家に不法侵入しており録画していたフェイトゼロを見ていて、俺も一緒になって見ていたら鉄拳制裁を喰らい、俺だけがこぶを作った状態で朝飯を食いその後登校。校門にて涼月に笑われる。近衛も堪えていた。そして次に登校してきた坂町兄妹にも笑われ黒須には、まあ、頑張れと励まされた。その後みんな揃って教室へ行こうとしている所へ背後からドロップキックを喰らい、見てみるとあら不思議、誰もいない。探していると脛を蹴られ見てみるとそこには雪（自然物の方だからな？）の如く真っ白な髪をしたちゃんまいなんとも

可愛らしい生物の鳴海シュレディンガー、レン（俺が勝手にそう呼んでる）がいた。どうして会いに来ないのかと文句を言われたが昼飯をおごっちゃると言うとルンルン気分で去る。そして俺睨まれる。可笑しくね？

授業中寝ていると背後にいる雪からシャーペンを首に突き刺される。殺す気か？ とそれはおいといて次寝たら……と無言のプレッシャーを背後からひしひしと感じながら午前の授業を全て受ける。昼休みになると同時にレン（ちゃんと終わりの挨拶をしてきたのか疑わしい）登場。鳩尾に頭突きを喰らう。喰らってばかりだな俺。まあ、いい。食堂に引つ張られカツカレーを奢る。食い終わった後、口に付いていた米粒、カレーのルーを拭くとなにやら嬉しそうな顔をしていた。食堂にいたほぼ全ての男子から何故か睨まれる。なんでだ？ 教室に戻ると歌織から何も無かった聞かれる。とりあえず一部始終を話すと涼月からロリコンと罵られる。だから、可笑しくね？ ていうか涼月は何故私服？ そのことを聞くと制服嫌いと答えられる。似合うと思うけどな、と言うと数秒の間を置いて何故か赤面しながら明日着てくると言う。歌織に両膝がつくんされた。結構効いた。

午後も引き続き雪からのプレッシャーを受けながら過ごす。俺だけに向けるとか流石女将さん、パネえっす。六限の体育にて休憩中上を見るとレンと目が合う。手を振ると小さく降り返してきた。何故かいた歌織にドロップキックを貰う。鳩尾は勘弁。俺気絶。目を覚ますとそこは知らない天井、なんてことがあるわけも無くそこは保健室で横にはここ送りにした張本人歌織がいた。HRも終わっていたらしく制服で俺の荷物もあった。雪は夕飯の材料を買いに先に

歸ったそうた。さて、今日はなんだろうな？ と楽しみにしている
と保健室の扉が開き、まよチキ一話にて、坂町が黒瀬に男が好きな
のか、と大声で聞かれた時に引いていた中の一人、赤っぽい髪をツ
インにした（分からん人は一話を見んさい。結構最初の方だから）
女子生徒が入ってきた。俺に用事があるようでその顔は何故か赤面
しており、それで何か分かったのか歌織は先に帰っていると言い、
入り口にいる女子生徒に何か言って出て行った。

その後屋上に来てと言われ、着替えた後荷物を持って保健室を後にし、律儀に待ってくれていた女子生徒、名は「恋野舞こいのまい」と言うらしい。と共に屋上へ行き、冒頭に至る。回想終了。うん、どこでここに繋がる要因があったかさっぱり分からん。というか俺は恋野さんとは一度も話したことは無い……………そういえば去何か話したことがあるような気がしないでもない気がするかも知れない。

「あ……あの……お返事、は……？」

「え？ あ、ああ。ごめんごめん」

「あ……そうですか」

「は？」

回想に夢中になっていて俺は恋野さんの声に反応するのが遅れてしまいい、謝ると何故か恋野さんは顔を俯かせてしまった。ん？俺は今恋野さんに告白された。それで返事を聞かれる。俺、ごめんごめんと答える。

「ああ！ 違う違う！ 今のは告白の返事じゃないから！ 誤解するな！」

一つの回答に行き当たった俺は慌てて否定した。それでなんとか伝わったのか恋野さんは顔を上げ少し安心したような表情になる。ふう、良かった……いや、あまり良くない気はするが、まあ、良かった。

「それで、返事の前に聞きたいんだけど、良いかな？」

「あ、うん」

「俺、恋野さんと接点ってあったっけ？ 悪いけど、去年少し話したかもっていう曖昧な記憶しかないんだ」

「あ、いいよそんなの。あたしそれくらいも覚えられてないって思ってたから！」

悲しいな、おい。

「でも……そっか……それくらいでも、覚えてくれてたんだ」

恋野さんは夕焼けの中でも分かる程顔を赤らめ、胸の前で両手の指をくっつけてもじもじとし出した。可愛いやっちゃな……。その後、恋野さんは去年のことを話した。

「ほら、学校全体で街の清掃活動をしたことがあったでしょ？ 自由参加型の」

「……………ああ、あったな」

かなり時間掛かったがなんとか思い出せた。レンに絶対参加しろと上目遣い＋涙目で言われ周りから見れば俺がレンを泣かしている様にしか見えない構図を作り出す為になどと人の多い食堂でそれやりやがって避難の視線をばし浴び、ある意味脅しと変わらん

ことをされ参加したんだった。多分そんなことされなくても参加したけども。朝雪と歌織が二人揃って腹にダイブ決めてきたからな。その後無理矢理連行された。学校に着くとあら不思議、俺はジャージに着替えていたのが未だ疑問だが細かいことは気にしない。

「それで、注意事項とかの説明が終わって、みんなバラけて行っただけどあたしは軍手を教室に忘れててね……それを取りに行ったの」

「ふむふむ」

「それで、軍手は問題無く取れたんだけど、誰かがボール遊びでもしてたのか、野球ボールが飛んできて……」

そこまで言われた俺は思い出した。あの時、俺は朝何も食ってなかったからせめて水だけでも飲んでおこうと思い、寝惚けていたのかグラウンドに水道があることを忘れ校舎に入り、ついでに顔も洗って眠気を飛ばし戻ろうとした所で教室の中に人影が見え中に入り声を掛けようと思った所でボールを投げようとしている奴が見え、危ねえなあ、と思っていると手元が狂ったのか知らんがそいつの投げたボールが教室に飛んできた。何とかボールをキャッチするのは間に合ったが、ガラス片が顔の至る所に掠り地味にいたかったのを覚えてる。

「俺が助けた……あれを助けたと言って良いのか分らんが、その時の？」

「うん。それから、新山君のことが忘れられなくなって……毎日見かけてはいたけど、その……涼月さんとか雪さん、緋耶麻さんとかがいつも近くにいたから、何かあたしなんか声掛けても、駄目だろうなって」

「ん？ あれは単に教室移動とかだからだぞ？」

「でも、新山君って人気あるから……」

俺が人気なんてあるなら、この学校は少しやばいと思う。生まれ
てこの方告白なんて今日を除けば一度も無い。学校でも、何かがあ
ったことはないしな……何か偶にかなりの両のチョコを貰うことが
あったりしたが、あれは何だったんだろうか？　そういえば歌織も
渡してくれたな。765プロのみんなもか。涼月とレンからは何故
か二人共遠方からぶん投げて来たんだが……手がめっちゃ痺れたの
は今でも覚えている。女子野球があるならあの二人はピッチャーと
してやっていけるな、うん。

「さっきも言った通り、あたしも新山君が好きなの。それで、もう
我慢できなくなって、告白をしたんだけど……どうかな？」

そういう恋野さんの瞳は真剣その物で、気持ちに嘘がないことは
俺でもハッキリと理解できた。

だから俺も、嘘偽りの無い気持ちで答えることにした。

「ごめん」

恋野さんの瞳を真っ直ぐに見据えて、俺は拒絶の言葉を放つ。

「あ、あはは………やっぱり、そうだね。あたしなんか、涼月
さん達と比べたら、可愛くもなんともない「んなことねえよ」え？」

俺は恋野さんの言葉に割り込んだ。俯かせていた顔を上げ、恋野さんは俺を見る。

「あいつらと誰かを比べたことなんて、俺は一度も無い。けど、確かにあいつらはみんな揃って可愛いさ。美人とも言える。でもな、それがお前と何か関係あるのか？」

「え？」

「『お前はお前』だろ？ 比べる必要がどこにある？ それに、お前だって可愛いぞ？」

「……………ふえ!？」

「笛？」

いきなり全く関係のない単語が聞こえ、恋野さんを見てみるとまるでトマトの如く顔が真っ赤になっていた。心なしか湯気まで出ている様な気がする。あたふたしている恋野さんに心配になった俺は近づき熱でもあるのかと思い、一言断ってデコとデコをくつつけた。うわあ、超熱いんですけど……大丈夫かこれ？ などと思っていると、

「ふにゃ~~~~」

と謎の声を洩らしながら恋野さんは膝から崩れた。慌てて受け止めて見てみると、何故か恋野さんは気を失っていた。

「俺……なんかしたか？」

とりあえず恋野さんを背負い、二人分の荷物を持って学校を出た。悪いとは思ったが、恋野さんの家を知らない俺は鞆から携帯を拝借し家に掛け事情を説明しなんとか家に送り届け自分の家に帰った。

夕飯が冷めてしまったとむくれる雪と歌織に謝ると、今度何か埋め合わせをすることで許してくれるらしく一緒に出かけることになった。その後、温め直した夕飯を三人で食べ、歌織に恋野さんとのことを聞かれありのままを話すと、脛を蹴られた。怒ろうと思ったが、歌織は何か今までの中では一番ではないかと思われる笑みを浮かべており、それを見た俺は怒る気などどこかに飛び去って行ってしまった。まあ、いいか。

そして、その翌日から、俺達の所に恋野さんが来るようになるが、それはまたの機会に話そう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2462ba/>

アイドルマスター×まよチキ

2012年1月10日12時50分発行